埋文センターの調査から　速報

佐屋利遺跡（京丹後市）

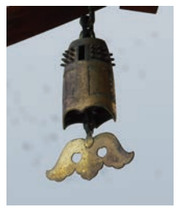
堀（SD01）全景

佐屋利遺跡は、丹後半島を貫流する竹野川右岸の微高地上に位置する集落遺跡です。過去２回の発掘調査で、弥生時代中期の竪穴住居や土坑、平安時代末期から鎌倉時代にかけての荘園領主の屋敷と見られる遺構がみつかっています。

令和５年度の調査では、風化した花崗岩を掘り貫いた全長36ｍ以上、幅８ｍ以上、深さ約５ｍを測る巨大な堀跡を発見しました。堀は一挙に埋められたためか、遺物はあまり出土しませんでしたが、戦国時代の土師器・国産陶磁器・輸入陶磁器などが含まれていました。特に、当時茶器として千利休周辺で愛用された黒楽茶椀が注目されます。堅固な構造や、出土遺物などから、この堀は戦国大名一色氏家中の有力者の居館に伴う堀と考えられます。堀が埋められた時期は、天正10（1582）年、本能寺の変ののち、丹後守護一色氏が滅亡した時期にあたります。

遺物が語る京都の歴史

風招（井手町栢ノ木遺跡・井手寺塔跡）



参考
薬師寺金堂の風鐸

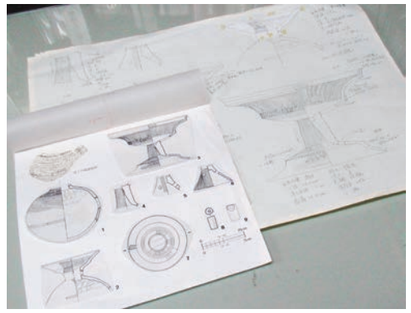
風招とは、仏殿など寺院の主要な建物の屋根の隅に吊るされた風鐸の一部で、風を受けてゆらゆらと揺れる装飾板です。

この風招は、奈良時代に橘諸兄が建てたと伝わる井手寺の東側に、平安時代前期になって建立された塔跡から見つかりました。銅の上に金メッキが施された金銅製で、現在でも金色に輝いています。

発掘調査
よもやまばなし

熟練の技術が必要！

出土した遺物の形と作り方がわかるように、全国共通の書き表し方で原寸の実測図を作図します。それを50％に縮小し、丸ペンや製図ペンで浄書し、報告書の原版にします。熟練した技術が求められます。



【発行日】令和６年３月
【編集・発行】
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 - 0002　京都府向日市寺戸町南垣内 40 番地の３
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

KYOTO ARCHAEOLOGY CENTER
2024
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

もっと知りたい

京都の遺跡

第14号

古代の文字

日本の文字のはじまりは？

現在日本で主に使われている文字には、中国から伝わった「漢字」と漢字をもとに作られた「カナ文字（ひらがな、カタカナ）があります。古代に紙に書かれた文字の多くは失われてしまいましたが、発掘調査では、墨で文字が書かれた木の札（木簡）や、土器（墨書土器）などに出会うことがあります。文字が本格的に使用され始めたのは、白村江の戦い（663 年）で敗れ、唐を意識して文書主義を特徴とする律令制度などの導入をはかった 7 世紀後半の飛鳥時代からです。当時はすべて漢字で表記されていました。やがて漢字に音を当てた「万葉仮名」が使われはじめます。万葉仮名はひとつの音に多くの漢字をあてていたため、全部で 1,000 字もの漢字が使われていました。

木簡 - もっかん -

薄い木の板に墨で文字を書いたものです。受取人にあてた文書木簡のほか、地方から京に運ばれる貢進物に付けられた荷札木簡、漢字の練習に用いた習書木簡、そして九九木簡や、和歌などを書いた歌木簡などがあります。

文書木簡

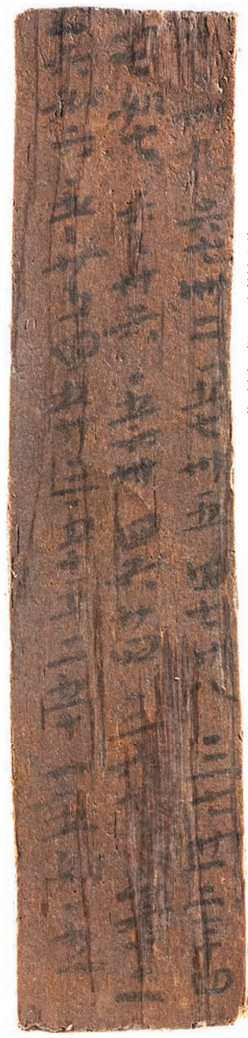
「御司召／上加□園依　上加□虫万呂　秦得万呂　加□乙人／右三人等為流人送召件人宣承知斎」と記され、「御司」から四人にあて、罪人を護送するよう出頭を命じています。（長岡京市　更ノ町遺跡）

荷札木簡

「海戸主海八目戸服部姉虫女米五斗」海（海部郷か）の海八目の家族である服部姉虫女が米五斗を貢進したと記されています。（木津川市　上狛北遺跡）　奈良文化財研究所撮影

習書木簡

「書央書書書」字の練習をしていたようです。（京丹後市　霊尾遺跡）



九九木簡

奈良時代の九九を表記した木簡です。当時の九九がその言葉のとおり、九九から始まり八九・七九…と続いていたことがわかります。役人が利用する一覧表だったのでしょうか。（京丹後市　霊尾遺跡）

歌木簡

歌一首を記した木簡です。「阿支波支乃之多波毛美□」と万葉仮名で記されており、万葉集に記載のある和歌と一致します（木津川市　国史跡 神雄寺跡）

墨書土器 - ぼくしょどき -

須恵器や土師器に墨で文字が書かれたものです。１～３文字程度の短いものが多く、「厨」「園」「倉」「□□寺」などがあり、使われていた須恵器・土師器の所属場所などを示すものが多いのではないかと考えられています。

「園」（長岡京市　更ノ町遺跡）

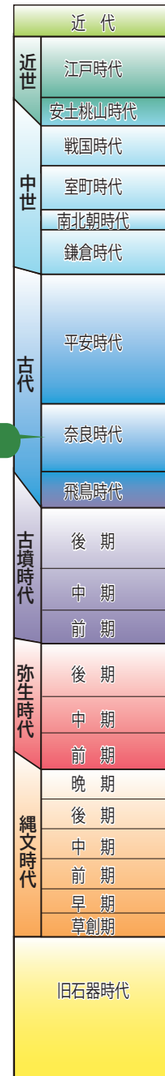
「倉」（京丹後市　霊尾遺跡）

「神雄寺」等（木津川市　国史跡 神雄寺跡）
馬場南遺跡として発掘調査を実施したところ、古代の寺院跡がみつかりました。「神雄寺」と書かれた墨書が多数出土し、文献にない「神雄寺」が存在したことがわかりました。そのほか、「黄葉」と記されたものやお経を記したものもあります。

文字瓦 - もじがわら -

刻印瓦

「真依」（井手町　井手寺塔跡）
恭仁宮式文字瓦と呼ばれるものです。急遽計画された恭仁宮の造営のために官営の瓦工房で特注品として製作されたものと考えられ、瓦工人たちはその出来高を確認するため工人名を記したようです。再利用、もしくはストックされていたのか、平城宮跡や東大寺など恭仁宮跡以外でも出土しています。

線刻瓦

「嶋曶」（井手町　井手寺塔跡）
瓦に文字や絵を線刻で描いたものがあります。写真の文字は、「嶋麿」の麿が万呂で表現されているようです。